

わが社のいち押し

権田金属工業（中央区宮下）は10月、創業100周年を迎えました。同社は1918年（大正7年）創業の非鉄金属メーカーで、伸銅製品を製造販売しています。銅は「人類が初めて手にした金属」とされ、古くから生活に欠かせない存在です。デジタル時代となった今でも、銅は導電率が優れた素材として幅広い産業で使われており、同社の製品も活躍。メイド・イン・ジャパンを下支えしています。一方、実用金属として一番軽いとされるマグネシウムの研究開発にも注力しています。加工が難しいとされるマグネシウムですが、同社では加工しやすく強度があり、表面処理もしやすいマグネシウム合金薄板「AZ61」の量産技術を業界に先駆けて開発。経済産業省から2008年度「元氣なモノ作り中小企業300社」にも選定されています。今回は権田源太郎社長に話を聞きました。

■業界シェア5割

同社が製造販売する製品は、黄銅棒や銅棒、銅ブスバー、メッキ用銅

アノードなどの種類があります。どれも聞き慣れないものばかりですが、実は私たちの生活と密接なつながりがあります。導電率に優れる銅製品は、さまざまな電気製品の部品や変電設備などに利用されています。また、同社が製造販売する「銅リング」と呼ばれる製品は、鉄道車両用モーターの重要部品となっており、業界シェア5割と国内屈指の生産量を誇っています。

■不屈の精神

権田金属の歴史は大正時代にまでさかのぼります。大正7年に権田社長の祖父・権田藤三郎氏が横浜で「権田伸銅所」を創業したのが始まりです。当時は船舶や機械部品に使われる黄銅棒を製造、海軍に納入していました。戦後は状況が一変。初代、そして先代である父（権田忠志氏）は大変な苦労が続いたと言います。それを「不屈の精神」で乗り越え、会社を発展させました。1983年に権田社長がバトンを引き継いでからも、あのリーマンショックに見舞われます。しかし、事業の多角化や銅製品の用途開拓などで克服。100年企業へと導きました。

「100年企業になったのは」初代、二代目（父）が不屈の精神で頑張ってきたことが大きいですが、「電気が使われれば銅も使われる」とい

う、銅製品の普遍的な需要にも支えられました」と権田社長は話します。現在は銅製品の新たな用途として、世界中で普及している電気自動車（EV）のモーターなどに注目しているそうです。

■次の200年へ

歴史がある銅製品を扱う一方で、これからの素材として期待されるマグネシウムの関連技術開発にも力を

創業100周年迎える 伸銅とマグネシウムで 世界をリードする企業

権田金属工業(株)
代表取締役

権田 源太郎さん

入れています。

マグネシウムはアルミと比べ同等の強度で、重さは約3分の2ですが、加工が難しいとされています。その中で同社が挑戦したのが、凹凸がないマグネシウム薄板の生産です。銅やアルミは薄板にする際、ローラーにかけても割れませんが、マグネシウムは割れてしまいます。同社では2003年、この課題を克服した製造法「ゴンダ・ツインロール・キャスティング・システム（GTRC）」を開発。以来、マグネシウム合金板の普及に取り組んでいます。

パソコンの筐体から高速鉄道車両、建材、そして航空・宇宙分野など、あらゆる分野でマグネシウムの活用が見込まれており、それに伴い同社の技術も求められてきます。「マグネシウムは伸ばしていきたい分野です」と権田社長は言います。100年企業の伝統を継承しつつ、最先端分野での研究開発で次の200年に向けた道を歩み始めています。